

令和 2 年 4 月 17 日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12090

研究課題名(和文) 父親の育児行動を促進する看護介入プログラムの開発 - ランダム化比較試験による検討 -

研究課題名(英文) The development of a nursing intervention program that promotes child-rearing behavior of fathers

研究代表者

山口 咲奈枝 (YAMAGUCHI, Sanae)

山形大学・医学部・講師

研究者番号：20431637

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、父親の育児行動を促進するためにパースプランを活用した看護介入プログラムを作成した。介入時のツールとして父親のためのパースプラン用紙を作成した。看護介入プログラムに参加した父親は、妊娠期には妻とのコミュニケーションを大切にするのを父親役割の一つとして認識していた。また、出産前から、誕生する子どもとの接し方を考えたり、心理的な側面で妻を支援することが父親役割だと認識していた。このことから、パースプランを活用した看護介入プログラムは、初めて子どもをもつ父親の役割意識を高めることができることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

父親の育児行動を促進するためには、妻の妊娠期から父親に対して父親役割を認識し、育児意識を高める支援が必要であると考え、本研究では、パースプランを活用した看護介入プログラムを作成した。パースプランを立てることで、近い将来におこる出産や育児を具体的にイメージすることができることから、男性の父親役割意識を高める効果が示唆された。妻の妊娠期から男性の父親役割意識が高まることにより、その後の育児行動の促進につながると思う。父親が育児に関与するほど、第二子出生率が上昇することから、父親の育児行動を促す周産期の看護介入は少子化社会の具体的な支援策になると考える。

研究成果の概要(英文)：In the present study, nursing intervention that promotes child-rearing behavior of fathers was implemented. An original birth plan for fathers was used as the intervention tool. The participants of the nursing intervention program were aware that one of the roles of fathers during the pregnancy period is to place importance on communicating with their wives. The participants of the nursing intervention program were also aware prior to childbirth that looking after the infant and providing psychological support to their wives were roles of fathers. These findings suggest that a nursing intervention program using a birth plan can raise the awareness of fathers' roles among men who are becoming fathers for the first time.

研究分野：母子看護学

キーワード：父親 育児

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 日本の父親の育児行動

近年、日本では父親の育児参加が促進している。男性の育児・家事時間を増やすために、日本では、男性の育児休業の取得促進や長時間労働を是正する働き方改革などの制度が充実してきている。また、20代30代の男性の70%が妻と同様に育児を行いたいと考えており、社会制度や父親の意識は積極的に育児参加する方向に変革している。一方で、6歳未満の子どもをもつ男性の育児・家事関連時間は週平均1日あたり83分であり、諸外国の育児・家事関連時間と比較すると、この数値は、欧米諸国の半分にも満たない。さらに、母親の育児家事関連時間の5分の1以下である。したがって、現状では、社会制度や父親の意識は育児参加する方向に変化してきているが、実際の行動には至っていないといえる。このような社会の変化に応じて、妊娠期に開催する出産準備教室は、父親も参加できるようになってきた。しかし、産前教室の支援の中心は母親であり、父親の参加は母親のサポート役としての側面が大きい。父親の育児時間が日本の2倍以上あるフランスでは、産前教室に加えて出産後の入院中に父親に対する育児指導を徹底している。また、オーストラリアでは産前教室に参加することで妊娠期から父親が家事を積極的に担うと報告されている。一方で、日本の父親への育児指導実施率は30%と報告されている。このことから、父親の育児行動を促進するためには、父親に向けた周産期の育児支援プログラムが必要であると考えた。

### (2) 父親の育児行動を促進する介入プログラム

研究者がこれまでに作成した父親の育児行動を促進するプログラムでは、参加した父親の家事時間は有意に増加し、家事役割の受容と育児能力の自信が高まった。一方で、父親としての発達や育児役割の受容は高まらず、育児時間に有意な増加はみられなかった。このプログラムは、知識の提供と育児手技の演習が中心であり、個々の父親の育児に対するイメージや、父親役割をどのように認識しているのかという育児に対する意識への働きかけが不足していた。森田ら(2010)は、父親役割行動を獲得するためには、妻の妊娠期から親となる男性が今後担うことになる役割負担を自認することが重要であると述べており、父親役割行動を考える契機として、父親役割モデルの想起、わが子の育児の想像、周囲が求める父親役割を認識することが関連していることを明らかにしている。つまり、父親の育児行動を促進するためには、妻の妊娠期から父親に対して父親役割を認識し、育児意識を高める支援が必要であると考えた。そこで本研究では、父親の育児意識を高める手段としてパースプランに着目し、パースプランを活用した看護介入プログラムを開発することとした。パースプランは、1980年にバラスカスが紹介し、1995年頃に日本で広まった。パースプランを立てることは、妊婦とその家族が出産や産褥期の生活の具体的なイメージを描くことや、出産への主体的な姿勢を養う効果がある。さらに、パースプランを活用することは、母親役割の獲得につながるということが明らかとなっている。日本では、パースプランを立案する対象は主に妊婦となっている。しかし、現在では、立ち会い分娩をする夫がパースプランを立案する取り組みが多くの施設で行われるようになってきた。さらに、父親がパースプランを立案することで、立ち会い分娩の満足感が高まることや父親としての自覚が芽生えることが明らかとなっている。これらのことから、妊娠期に父親が育児や父親役割を具体的にイメージし、育児意識を高めるツールとしてパースプランが有用であると考えた。そこで、本研究では、パースプランを活用して父親役割を認識し、父親の育児意識を高めて育児行動の促進を図るプログラムを開発することとした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、父親の育児行動を促進するために、パースプランを活用した看護介入プログラムを開発することである。

### 3. 研究の方法

#### (1) プログラム作成

父親の育児行動を促すバースプランを活用した看護介入プログラムを作成するために、母子看護学の教員や妊婦の保健教育に携わる助産師とともにプログラムの具体案を検討した。本研究プログラムの核となるバースプランには、父親役割、理想の父親像、わが子の育児、子どもがいる生活についてのイメージを含めることとした。次いで、バースプランの立案、修正、振り返りのプロトコルを作成した。また、文献検討から、立ち会い分娩をすることは、父親としての自覚をもつことにつながるが、父親の育児行動には関連がないことが示唆された。また、里帰り分娩と父親の育児行動との関連については、研究によって結果が異なっており、関連の有無が明らかではなかった。本研究の結果を一般化することを視野に入れると、様々な背景をもつ対象者をリクルートすることが重要である。しかし、対象の背景がばらつくことがバイアスとなるため、本研究の対象者には、立ち会い分娩をした父親を含めることとし、里帰り分娩に関しては分析から除外することとした。

#### (2) プログラムの効果の検証

作成したプログラムの効果を検証するために、妊娠 30 週以降の夫婦を対象に、分娩に関する知識の提供、バースプランの説明を含めた産前教室で調査を実施した。対象者には、父親役割行動尺度を用いたアンケート調査を実施した。この尺度は、情緒的支援行動 14 項目、直接的な育児行動 10 項目、家事 5 項目で構成されている。得点が高いほど父親役割行動をしようと考えていることを示す。また、どのような出産、育児をしたいか、どんな父親になりたいかなどを自由記載するバースプランシートを作成し、対象者に記入してもらった。

#### (3) 分析

分析には、SPSS for windows ver.23 を使用した。妊娠期と出産後の父親役割行動得点の比較には、ウィルコクソンの符号付順位和検定が用いられた。有意水準は  $p < .05$  であった。また、自由記述は、カテゴリー化を試みた。カテゴリー化の手順は以下の通りである。まず、自由記述を全て記載した一覧表を作成した。次に母性看護学領域の専門家 3 名で一覧表を読み直し、共通する意味内容を抽出した。最後にカテゴリー名をつけて分類した。

#### (4) 倫理的配慮

本研究は研究者が所属する施設及び調査協力施設の倫理審査会の承認を得た。対象者には、研究の趣旨等を説明した後に、文書で同意を得た。

### 4. 研究成果

#### (1) 父親役割行動

対象者の父親役割行動の得点は妊娠期よりも出産後の方が高かった。このことから、対象者は、妊娠期よりも出産後の方が父親役割行動をしようと考えていることが示唆された。特に、妻への情緒的支援得点は、妊娠期よりも出産後に有意に高くなった。夫が妻への情緒的支援をすることで、妻の育児満足感が高くなることや、妻の育児に対する自信が高くなると報告されている。これらのことから、夫が妻を情緒的に支援することは、夫婦協同で育児をする上で、重要な役割と考える。

#### (2) 父親役割の認識

バースプランに記載された自由回答について、カテゴリーに分類した。「夫婦の交流」カテゴリーは、夫婦二人の時間を大切にする、夫婦での会話を楽しみたいなど、夫婦で共に時間を過ごすことやコミュニケーションをとることに関するコードが分類された。このカテゴリーに関

するコード数が最も多かった。次に、「育児行動」は、沐浴や抱っこなどの子どもの世話に関するコードが分類された。「養育環境を整える」は妻の妊娠中から子どもを迎える準備をするコードが含まれた。「妻のサポート」は、妻に感謝する、ねぎらう、気持ちを受け止めるといった妻への情緒的支援に関する内容であった。

本研究の対象者は、夫婦の交流や妻のサポートを父親役割として認識していることが明らかとなった。日本では、妻が実家に帰省して出産する「里帰り出産」の風習がある。里帰り出産の場合は、出産後しばらくの間、妻とパートナーは物理的に離れて育児をすることになる。しかし、妻への情緒的支援は、電話やメールでの会話でも可能である。夫婦で共に育児に取り組む姿勢や結束力は夫婦関係の親密度を高めていく。里帰り出産などで物理的な距離がある場合は特に、夫婦の交流や妻への情緒的支援が夫婦関係に影響を与えると考える。出産前教室では、出産や育児について妻と話し合う時間を設けている。配偶者と育児について話したり考えたりすることで、父親役割の高まりを認識するようになるといわれる。さらに、パースプランを立てることで、近い将来におこる出産や育児を具体的にイメージすることができることから、出産前教室への参加が、男性の父親役割意識を高める効果があると考えられる。

父親役割として認識している行動には育児行動も挙げられた。育児行動は、子どもと直接関わる行動であるため、子どもの誕生後に実施することとしてイメージしやすい行動と考える。多くの出産前教室で、子どもの世話に関する手技の演習を取り入れている。しかし、出産前教室で受けた指導は忘れてしまうという参加者の意見もある。子どもの世話に関しては、妊娠期よりも出産後の入院期間に我が子の育児を通して経験する方が、教育的効果が高いと考える。したがって、出産前教室では、父親になる準備期にある男性に対して、妻を情緒的に支援することや子どもを迎える環境調整について情報提供することが父親役割意識を高める支援になると考える。その際に、パースプランを活用することで、対象者個々の生活環境や考え方に沿ったプランを立てることができる。

パースプランの自由記述には、家事についての記載がなかった。このことから、男性は、家事は父親役割ではないと認識していることが考えられる。また、本研究の対象者の平日の家事時間は育児時間よりも短かった。日本の6歳未満の子どもをもつ男性の家事時間は1日あたり34分である。一方、欧米諸国は110から134分であり、諸外国に比べて、日本の父親の家事時間は極端に少ない。例えば、オーストラリアでは妻の妊娠を機に、夫が積極的に家事をするという。日本では、積極的に育児に参加したいと考える男性が家事役割を分担しようと考えているとは限らない。事実、鈴木らは、育児に参加したいと考える男性は80%以上いる一方で、家事は女性の仕事だと思ふ男性が60%いたと報告している。妊娠期から男性が担うことのできる役割の一つである。男性が家事に関与するように促すためには、出産前教室の中で、夫婦間で、家庭内での役割分業を話し合う時間を設けてもよいだろう。

### (3) 今後の展望

本研究では、パースプランを活用した看護介入プログラムの開発を試みた。このプログラムは、妊娠期に妊婦とそのパートナーを対象とした集団指導の場で展開することを想定している。父親役割意識を高め、育児行動を促すために、どのようなプログラムを実践するのか、さらに検討が必要と考える。検討が必要なことの1つに参加者のニーズが挙げられる。先行研究では、初産婦と経産婦では産前教室で知りたい内容が異なっているという結果や、妊娠時期によって知りたい内容が異なったという結果がある。また、時代によって、妊婦の知りたい内容が変化しているという報告もある。産前教室の内容は、妊娠・分娩・育児を含めた産後の生活と多岐にわたる。参加者が実際にどのようなニーズと目的を持ち産前教室に参加しているのかを把握

することが、看護介入プログラムを検討する際に必要になると考える。

本研究を進める段階で、対象者のニーズを把握するために、保健教育の内容を検討した。その結果、退院指導として多くの病院で家族計画が説明されていることがわかった。しかし、研究者らが調査した結果では、保健教育の対象は褥婦のみでそのパートナーへの支援はされていないことが明らかとなった。近年、日本では、不妊治療後の妊娠や帝王切開術による分娩の増加、若年妊娠や高齢妊娠の増加など妊娠・出産を取り巻く背景が複雑になっている。少子化を改善するためには、妊娠・出産する世代の多様な背景に合わせた保健教育として産後の夫婦への家族計画を実施することが重要であると考え。また、国際学会で、これらの成果を報告した際、夫婦の問題なのになぜ夫には指導しないのかと海外の研究者から問題提起があった。本研究は父親の育児行動を促進する看護介入により、出生率を上昇させることを目指しているが、産後の保健教育として家族計画を加えることも今後検討していきたいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 尾瀨真悠子, 山口咲奈枝
2. 発表標題 夫の育児・家事協力とそれに対する妻の満足度が夫婦関係に与える影響
3. 学会等名 第45回山形県公衆衛生学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sanae Yamaguchi, Megumi Fujita, Tsugumi Hirayama, Momoka Higuchi
2. 発表標題 Family planning services for postpartum women provided by midwives in Japan
3. 学会等名 6th Annual Worldwide Nursing Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐藤 幸子  (SATO Yukiko)  (30299789)	山形大学・医学部・教授    (11501)	
研究分担者	藤田 愛  (FUJITA Megumi)  (70361269)	山形大学・医学部・准教授    (11501)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	遠藤 由美子  (ENDO H Yumiko)  (90282201)	琉球大学・医学部・准教授       (18001)	